

16世紀ペルー総督府の最初の日本人移民

La Migración Japonesa en el Virreinato Peruano Siglo XVI

宮 城 スサナ

MIYAGI Susana

この研究を始めたきっかけは3年前のある出来事からでした。

ペルーに訪問した時、ある友人から声をかけられ、ペルーポンティフィシャーカトリック大学のリバー・アグエーロ研究学会が会談を開く予定であり、私は招待を受けました。

会談の内容がとても興味深いものであった為、参加しました。

リバー・アグエーロ研究学会は何年もかけて研究し、ペルー総督府時代にアジア人がいた事を発見したことを発表する会談であり、この発見はペルーの歴史に大きな変化をもたらすことであった為、私は興味を持ち、ペルー総督府にアジア人の移民がいたことについて研究を始めました。

毎年資料を集めるためペルーを訪問し、リバー・アグエーロ研究学科のサポートのもと、この研究を続けています。

この発見のことについてこの場で発表致します。

この研究の目的は、1613年代リマ街にあった中国、日本、インド、ポルトガル移民（当時の植民地であったインドネシア人）の社会経済的特性を知らせるものである。使用した資料はペルー総督であったモンテスクラロス爵位の命令で行った市内の国勢調査であり、歴史学ではほとんど言及されていないが、その資料では市内にいた全ての在ペルーアジア人がまとめて登録されていた。

国勢調査に登録された在ペルーアジア人の記録はそこにいた人口の調査状況問題と生産の状況のバランスを確認することができる史料編纂物である。

この調査で在ペルーアジア人移住者が登録された内容は、名前、年齢、職業、社会的地位、滞留期間、宿泊施設や家族構成であり絵によって表示されている。

この収集の方法論で、リマへの入国を許可されたアジア人の太平洋横断ルートの分析、また彼らの植民地都市での経験した統合プロセスの分析や、特別な配慮された社会的地位や職業を受けた、リマの新スペイン王国に居住したアジア人との比較分析のデータである。



モンテスクラス侯爵自画像¹⁾

南米に到達したアジア人達

南米で最も重要なチャイナタウンの一つがリマ街にある。

世の中の常識では、ペルーにアジア人が訪れ始めたのは、ラテンアメリカの国々が解放され開発の枠組みの中である19世紀半ば、具体的に1849年である。これは確かに真実であるが、植民地時代の初期の数十年代からアジア人口の循環がはるかに少ないものであったが存在していたことが予想される。

植民地時代のペルーへの移民の研究は以前からされてきてはいた。しかし注目されたのは大西洋横断であり、ボートから降りてきたヨーロッパ人そしてアフリカ人奴隷の人数であった。

太平洋回廊のアジアの移民については歴史学では注目されない運命を辿ってきた。しかしこれはとても興味深いもので、この現象はリマだけでなく、ペルー総督府でも重要な役割を果たすものである。

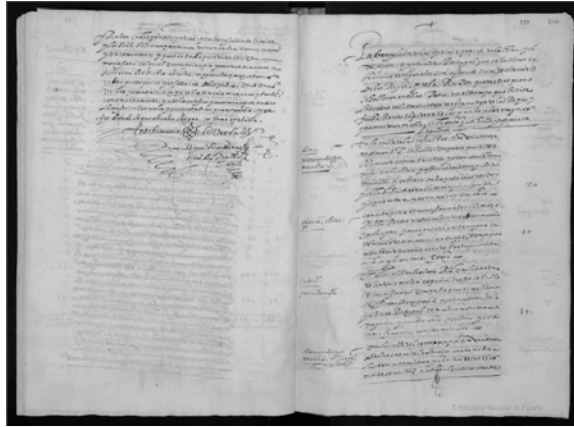
この研究の一般的な目的は、リマの植民地都市で16世紀後半から次の世紀の二十年に渡って住んでいたアジア人の重要なグループがいたことを確認するものである。参考の基準とするものは1613年に行った国勢調査である。

ミゲル・コントレーラス（陛下の公証人）が総督モンテスクラス侯爵からの命令により行った国勢調査は「ペルーの王の都市に居住しているものすべての人口調査」である。

国勢調査の注目したい点は「アジアの中国人男女、日本男女やポルトガル人（インドネシア人）男女の居住登録」の名簿（原本237～246ページ間）である。

その資料によると、アジア人はスペイン人の下にて働いたことなどが記録されていた。沢山の事実に基づく資料等があったにもかかわらず、歴史学によってこの国政調査は特別研究に値することはなかった。この資料に基づきアジア人の社会と経済を検証していき調査内の参考文献は「アジアの中国人男女、日本人男女やポルトガル人（インドネシア人）の登録」などについてである。この資料では「インディオ」の用語を尊重しており、それはアジアや東洋の適切な用語と思われる。

ペルー史学上において、このような国勢調査のデータなどがあったにもかかわらず、今



国勢調査 p 237・アジア人の記録 (一部)²⁾

まで特に研究されたことはなかった。

アジア人の登録状況は元の資料ではそれぞれの詳細な記録が残っている。

名前、年齢、職業、社会的地位、リマの滞留期間、宿泊施設、家族構成などのほか、どのようなルートにより入国したなどの個人情報を含む。またこのデータには、アジア人の社会と労働についての分析やリマとメキシコシティとの比較なども掲載されていた。

1. インディオ (在ペルーのアジア人を含む) 国勢調査 (1613年)：

1933年、研究者ジュリアン・パス、1939年アンヘル・ロセンブラント、1954年ルーベン・バルガス・ウガルテにより、国勢調査資料等が発見された。

1613年の国勢調査は彼ら3人によって発見され、1968年、歴史的解析が始まった。その年にデヴィッド・クックにより簡単な解説を加え出版化された。その書籍は国勢調査の価値自体を高くする結果となった。これらには重要な情報だけではなく、未発表な事実が含まれていたからであった。

以前では研究者に注目に値しないとされていた内容がまとめられ、初めて明らかにされたのである。

クックはアジア人の人口調査等などすべてデータとして残ってはいたものの、アジア人についてはほとんど解析をしなかった。

歴史的に注目されることは1613年の国勢調査の社会と経済、リマ総督府と新スペイン王国の記録が残っていることである。

アジア人の人口調査のデータも残してくれたことは大変ありがたいことである。

研究者のポール・チャーニとミゲル・ハラミーヨの論文は実によく分析されていた。チャーニは国勢調査のデータを使ってインディオと新スペイン王国の同化の解析等を行った。(1988年の研究にて)

ハラミーヨはリマ総督府にインディオがやってきたことなどを解析している。インディオが地方からやってきた理由は経済的なことによるものであった。

そのためリマの人口が増え、生産力が格段にアップしたとされている。(1992年の研究にて)

研究者アルボノスはこの人口調査の資料をアメリカにおけるヒスパニック系、ヨーロッパ

アン、アフリカンの移民の分析に活用した。(1977年)

研究者ローマンビリェナはこのデータをリマへの移民研究に文章を引用している。(1982年)

岩崎カウティは1613年時代のペルーとフィリピンにおける貿易の解析をした。その他の彼の研究は、国勢調査に記録されたアジア人のアジアとペルーの移動についてなどである。(1992年)

研究者パトリシア・パルマは国勢調査の中にある日本人の記録について分析した。(2013年) パルマはこのデータにある他のアジア人については特に詳しい分析等はない。

これらの研究にこの国勢調査が大変役にたったことは間違いのない事実である。

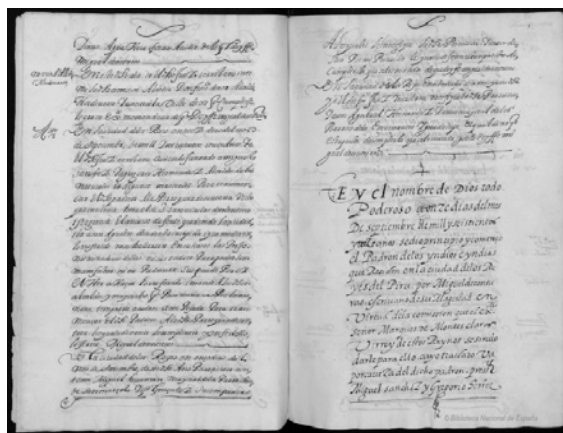
1613年9月5日新スペイン王国の公証人だったミゲル・コントラスは総督ファン・デ・メンドーサからリマに滞在するインディオの国勢調査の命令を受けた。この頃、リマの人口は増加しておりそれらを管理するためにも国勢調査の必要があったとされる。

モンテスクラロス侯爵はヴァイスロイ・ルイス・デ・ベラスコによる1600年に作成されたデータをもっており、そのデータによる人口は14,262人であったが1613年には25,154人まで膨れ上がっていたのである。

モンテスクラロス侯爵は王国の発展には人口の把握がまず必要と考えており、インディオの流入と経済は密接な関係にあると考えていた。彼の功績により財政や社会秩序が向上した。インディオは当時奴隷扱いされており、銀鉱山などの労働力として常に管理される対象であった。

国勢調査はすべての情報を管理するためにリマ市内にあるすべての家庭を調査し、その結果が今回のテーマであるインディオ国勢調査である。

それは1613年9月5日に始まり、1614年1月28日に完了したとされる。



国勢調査施行日²⁾

2. リマにおける中国人、日本人、ポルトガル人（植民地であったインドネシア人）について

1620年、ポルトガル人の貿易商レオン・ポルトカレロによると“ペルーにはスペイン各

地からの移民が多く存在し、他にフランス、オランダ、イタリア、ギリシャ、イギリス、ドイツなどからの移民もいた。ポルトガルの領事館がリマにあった。”とされる。

当時インドネシアはオランダとポルトガルの植民地であった。ポルトガル領インドネシアは現在の東ティモールにあたる。

1580年銀鉱山にての採掘が始まり、それらによってリマ市の経済は潤っていった。上流階級であるスペイン人はインディオや移民などに奴隷としての地位を押し付けていた。この当時リマの人口は25,000人だった。

人口構成比は奴隷10,386人（41%）、スペイン人9,660人（39%）、インディオ4,954人（8%）であった。アジア人は奴隷やインディオの統計の中に含まれている。

のちの調査により、当時のインディオが奴隷逃れなどの理由により、統計に含まれていないことが判明された。（1992年）そのためこの数字より多くのインディオがいたのではないかとされている。

当時、現在のチリからの移民よりアジアからの移民の方が多かった。このデータは驚くべきことである。

なぜなら、アジアからの距離はチリからの距離の何倍もあるからである。

この国勢調査からはアジア人の数は114人（5.5%）ということが分かる。そのうちの20人は日本人であり、中国人は38人 残りの56人はポルトガル人（インドネシア人）であった。



リマ総督府行政分割図³⁾

別の記録には、アジア人が109人となっているものがあるが、増えた数は配偶者やその子供などとみられている。中国人の中にはマニラにて洗礼を受けたのちペルーに来たものもいた。109人のアジア人のうち半分はリマ到着時の記録が残っている。そのうちの26人の中国人はマニラからきたものである。

婚姻のデータによると、32%のアジア人は婚姻関係がありそのうちのほとんどが中国人であり、日本人は1人で残りは未婚であった。中国人の婚姻の数が多いのは、ペルーに到着する前にすでに婚姻関係があったためとみられる。中国人の婚姻数の多いもう一つの理由は経済的に満たされていたことにもよる。彼らはさまざまな技術を持っており、他国においても経済活動が可能だったとみられる。

その一方、ポルトガル人（インドネシア人）はほとんどが奴隷であり、26家族中、子供がいたのは10家族だけであった。経済状況の良い家庭のみ子供を持つことができたため、中国人は多くの子供を持っていたとされている。

特筆されるべきことは、異人種間結婚があったことである。そのことにより、混血（メスティーソ）の人種が生まれた。

国勢調査にはポルトガル人（インドネシア人）と中国人の結婚の記録が残っている。

アジア人同志のみではなく、スペイン人やメキシコ人などとの婚姻もあった。それらの子孫はクレオールと呼ばれる。またアフリカ系奴隷との婚姻の記録もある。

彼らの生活圏はスペイン人などの上流社会とは別のコロニーがあり、奴隷たちとも別であった。生活圏はすべて階級によって隔離されていた。

国勢調査に記録されているアジア人の年齢は12～40歳であり、労働力として可能な年齢で、メインの労働者の年齢は20歳代であった。

当時アジアからの移民と貿易は深い関係があったとされる。

表2ーアジア人の入国記録⁴⁾

1590-1599		1600-1609		1610-1613	合計
1590-1595	1596-1599	1600-1605	1606-1609		
5	1	13	5	2	26
3	1	7	5	2	18
			3	2	5
8	2	20	13	6	
10		33		6	49

3. リマへのアジアからの入国経路

モンテスクラロス侯爵はアジア人の入国経路についてデータを収集していたとみられる。特に東洋の貿易ルートの開拓をすることが目的であった。

1579年、フィリピンからメキシコ経由でのペルーへのルートに於いてアジア製品や銀などの貿易を始めた。

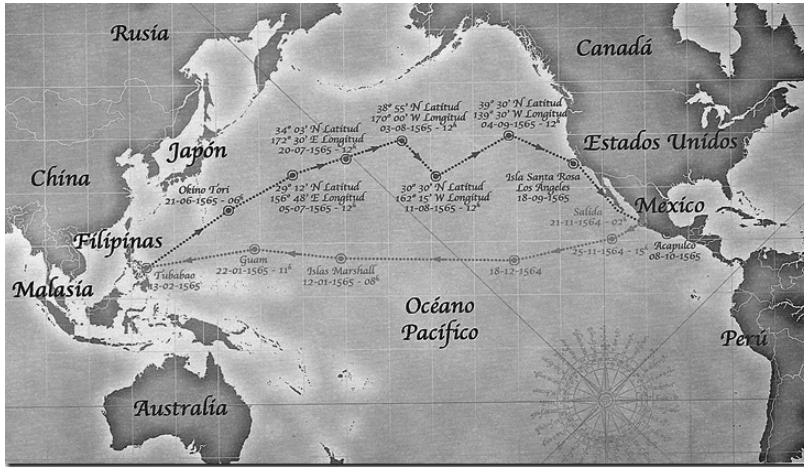
しかし1604年、スペインのフェリペⅡによる貿易規制によってメキシコへの中国人移民は禁止される。メキシコはスペインとの貿易関係を抹消したかったためである。

モンテスクラロス侯爵は国勢調査の結果を利用し、太平洋上における貿易を開始した。フィリピン、メキシコ、ペルー間の三か国貿易のルート以外も開拓している。アジアとペルーの貿易はスペインによって禁止されていたが、実際には貿易を行っていた。スペインの管理下にいたペルーであったが、密輸という形でアジアとメキシコとの貿易を続けていたのである。

彼は1603年から1617年までメキシコの総督としてさまざまな法律や投資などに関わっていた。

マニラからのガレオン船（15～17世紀に新大陸間航路で使用された大型帆船）に移民と奴隷を乗せ、メキシコまで行き、その後ペルーへ行ったとされる。その際、アジアの製品を密売していた記録が残っている。また、イエズス会の多くはインドネシアからの奴隷を伴っていた。

このようにアジアとの貿易と移民は深い関係にあった。モンテスクラロス侯爵は国勢調査を行った理由のひとつにリマにおけるアジア人の人口を把握したかったというねらいがあった。



アジア・ペルー間貿易船ルート I ⁵⁾



アジア・ペルー間貿易船ルート II ⁶⁾

4. 社会的状況とアジア人の職業

この国勢調査によるアジア人の社会的地位や職業の半分は奴隷のカテゴリーに含まれていた。フィリピンからの奴隷はマニラにて100ペソで買われ、メキシコにて420ペソで売られた後、スペイン人によって連れられペルーの奴隷にされていた。このようなことが国勢調査のデータに載っている。

奴隷でないアジア人と奴隷との明確な違いははっきりされていない、自営業を営んでいた中国人のほとんどは奴隷ではなかったが、記録上にはなにも残っていない。国勢調査のデータには、名前などの記録がない日本人が一人いたことが分かっている。彼は奴隷ではなく、ソレテロとコルタカベサと呼ばれる服飾職人であった。彼はポルトガル人（インドネシア人）と婚姻関係にあり、300ペソ支払い彼女を奴隷から解放させている。

中国から来た男性は75%がフリーランスの奴隷として働いていた。どのような仕事をし

ていたかはよくわかっていない。また、ポルトガル人（インドネシア人）の女性もフリーランスの奴隷としてスペイン人の家で働いていた記録がある。彼らの仕事は生地加工を行ったり、製品に仕立てたりしていた。（特に靴の中敷きやスペイン人のエリザベスカラーなどの服飾職人であった）その技術のレベルは高かったとみられる。また賃金も他の仕事より良かった。

表3－職業の分布

条件／職業	中国	インドポルトガル	日本	合計
奴隷	6	30		36
服飾職人	14	3	3	20
ハウスキーピング	3	5		8
テーラー	1			1
石工	1			1
れんが職人	1			1
刺しゅう		1		1
コック		1		1

中国人の中には個人経営を行っていたものもあり、彼らは経済的にも恵まれていたとされている。記録にはスペイン語に改名されたアンドレス・ベレス（32歳）、アンドレス・ヘレス（39歳）という中国人事業主の記録が残っている。彼らの店は繁華街（職人通り）の中心にあったが、組合などのグループに参加することはなかった。

ちなみに在メキシコの中国人は理髪関係の仕事に就くものが多かった。しかしペルーにおいてはあまり多くはない。両国における中国人は経済的に自立していたため、現地のコミュニティとの交流はほぼなかった。そのため中国人を雇うことを嫌い、差別などが存在した。（当時差別されていたのは中国人だけでなく、黒人とムラート（白人と黒人の混血）などがいた。）ペルーにおけるすべてのアジア人は自分たちと中国人との区別を強調する必要があった。

他の奴隷のアジア人はハウスキーパー、テーラー、石工、レンガ職人、コックなどの職に就いていた。

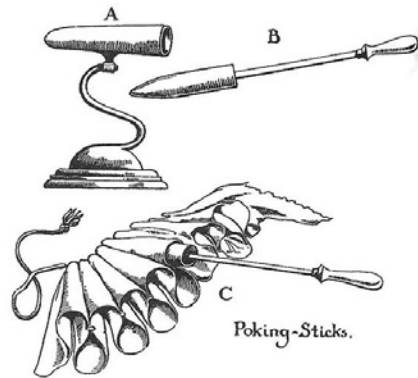
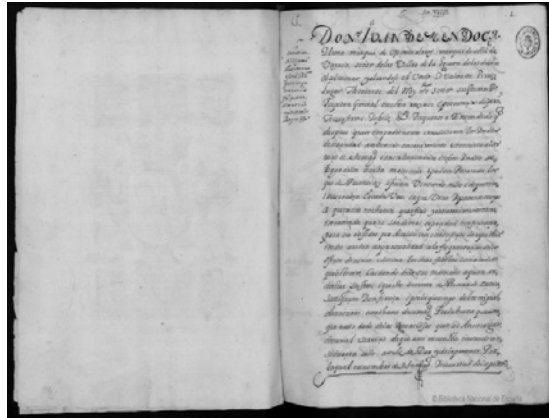


Fig. 717. Poking-sticks

服飾職人の職務内容⁷⁾

5. 現在に残る「総督府の国勢調査」

今回の国勢調査は、17世紀初めに土地管理の再編成のため、モンテスクラス侯爵からミゲル・コントララスが命令を受け作成したものである。



モンテスクラロス侯爵による辞令

この原本は現在スペインのマドリッド国立図書館に保存され、32×23センチの羊皮製、256ページの装本仕様になっている。羊皮製のカバーの下の表紙にはモンテスクラス侯爵の紋章が羽ペンにより黒、青、金のインクで描かれている。内部には居住者の詳しいデータや商業区や公共機関なども記録に残っている。

また、現在では使用されていないネイティブ言語なども載っており、言語学上においても興味深い内容がいくつかある。



国勢調査表紙

この国勢調査はラテンアメリカ初のものであり、これ以外に当時の記録は残っていない。そのため歴史的価値が高く大変貴重なものである。この資料は海外の研究者の間にお

いてもあまり認知度が高くなく、今後さまざまな研究に影響を与えると思われる。

一般的にはペルーへのアジア人の移民は19世紀初めとされているが、この国勢調査によって、17世紀初めにはすでに存在していたことが分かった。1953年、堺の商人であった呂宋助左衛門がフィリピンとの貿易をしており、ペルーに渡った日本人もなんらかの関係があったのではないだろうかと推察される。17世紀からのペルーとアジアの結びつきは現在のペルー日系人社会とも強く関係しているのではないだろうか。日系人はペルーにおいて経済、文化的にも多大な影響を与え、自国とペルーの文化との融合、現地化など地域に溶け込んでいる。

スペイン・マドリッド国立図書館には多くの歴史的価値のある資料が保存されているが、この「1613年・リマ総統府国勢調査」の資料は最も古く、世界的にみても大変貴重なものである。ユネスコの「世界の遺産」(memory of the world: 2014年11月)にも登録されている。

1613年インディオ国勢調査

ペルー・ポンティフィチャー・カトリック大学

リバ・アグエーロ 研究学会

スペイン・マドリッド国立図書館

1 リマにおけるアジア人の記録内容 (一部抜粋)

	名 前	年 齢	原産地	状 態	住 居	滞在 日数	職 業	条 件		
1	アンドレス Tacotán	20	マニラ中国	シングル	サイモン・ ディアス店。	3年	Soletero 服飾職人			
2	パブ ロベ レーダ	40	マニラ中国	シングル	サイモン・ ディアス店。		Soletero 服飾職人			
3	ファン・ロ ドリゲス	34	インドボル トガル。マ ラカ	シングル	アントニ オ・メロン ショップ。 ロイヤル・ カレッジ・ ストリート		テーラー	奴隷		
4	マシュー・ サンチェス	40	マニラ中国	ク リ ス ティーナバ スケスと結 婚	ストア博士 シブリアー ノ・デ・メ ディナ。ス トリート		Soletero 服飾職人			
5	アロンソ・ デ・グスマ ン	35	中国マニラ	フランシス カ(24)と結 婚	教会	18年	Soletero 服飾職人		(1)マグダ ラのマリア 2ヶ月	
6	イザベル・ デ・カンポ ベルデ	25	中国、 Xagua	処女	サンディエ ゴの家ヌ ニェス・ デ・カンポ ベルデ	16年	使用人			
7	クララデカ ンポベルデ	30	中国、 Xagua	フランシス コ・フアレ スと結婚		13年				と靴職人の 夫、
8	マ リ ア・ デ・カンポ ベルデ	36	中国、 Macan	処女		5年				

16世紀ペルー総督府の最初の日本人移民

9	ベアトリス・デ・カンポベルデ	24	インド、ポルトガル、マラカ	22年に結婚	サンディエゴの家ヌニェス・デ・カンポベルデ	10年	使用人	—	—	。
10	ディエゴ・Matigon	33	中国、ボンボン	シングル	Viscaíno・Uralde	9ヶ月	服飾職人	—	—	.
11	ルイス・エルナンデス	25	中国、マニラ	ロベス、シチリアと結婚	教会から移動	8年	服飾職人			
12	ファン・ロペス	30	中国、マニラ	キャサリン、26と結婚し、	内務大臣アントニオ・ナヘラ	6年	Soletero 服飾職人			
13	メルヒオール中国	22	ポルトガル、インド、ゴア	シングル	キャプテンファン・バスケス家アクーニャ	10年		奴隷		
14	Sigura ジョアン	22	中国	マルコスアラゴンと結婚、「メスティーゾ」	メルヒオール・デ・Sigura 家、Ampuero			奴隷		
15	ポーランド Sigura	36	中国、マラカ	処女	メルヒオール家	13年		奴隷		
16	「その他のインディアン」	40	中国、Xagua	ロレンツォと結婚		20年		フリー	1アナ・マリア(12)シチリア7ヶ月	
17	エレナ	40	インドポルトガル	処女	Recio ハウスガブリエル・デ・カスティーリャ	1年		奴隷		
18	ディエゴ・デ・プラド	24	日本	学士号	政府長官の家	3年間		服飾職人	金融なし	
19	《その他のインド》	18	日本	学士号	政府長官の家	1年間		服飾職人		
20	スサナベルナル		中国	トマス・サラテと結婚、妻	フランシスコ・バスケス家			奴隷		キャプテンルーカス・ベレスの奴隷。サラテは Tunja を生まれ
21	ファン・デ・エル・カンポ	30	中国、マニラ	エスペランザ・デ・マニラ (25) と結婚	セバスチャン・ロドリゲスのショップ、大工	8年				父ディエゴバスタブマニラ Geronimo 故人の息子のもう一つの孤児
22	アンドレス中国	26	ポルトガルのインド、マラッカ	学士号	ベドロ・デ・サンティスコ	5、6年		奴隷		
23	サンフランシスコマニラ	40	中国、マニラ	ワヌコのメスティーソインドと結婚	サンフランシスコクイーンショップ	10年間	家族			

24	カタリナ	12	中国の王国	独身	フアン Bonilla	5年間		奴隷		
25	アンドレス・ペレス	32	中国、マニラ	イザベルと結婚	商人の街	14年	家族			店があります。彼の元 encomendero だったペドロ・デ・ベラ
26	インド	40	パンパンガ州中国	アナ Biáfara と結婚	Calle ラマーセド。ホアン・マルドナドのショップ	10年間	家族	フリー		《はカシーク》
27	インド	28	ポルトガルのインド	学士号	カサ・デルイス・デ・トレス。Plazuela・デ・サント・サンディエゴ			奴隷		トレスを売ったロベ・デ・ウリョアをメキシコから来た
28	フランシスカ・デ・ケサダ	28	ポルトガルピソ	ムラートの奴隷ルイス・デ・ケサダと結婚	家の大尉 Jacome・デ・ケサダ	5年間		奴隷、		
29	アグスティン	い?	中国の原住民	独身	教会の近く		服飾職人			
30	ペドロ	24	ポルトガルのインドのカースト Xaguay	フアナアンゴラブルネット奴隷と結婚。	サンフランシスコ・デ・トロの家、	幼少期より		奴隷		
31	インド	26	日本、北海道	アンドレア・アナ、ポルトガルのインドと結婚	教会の反対側 Calle サンアグスティン	Montescaros	服飾職人			妻は10年、ペドロ・テノリオの奴隷であった。彼女の夫は、300ペソでそれを買った
32	パブロ・フェルナンデス	18	マラッカのポルトガルのインド	独身	フアン Ibáñez ショップ	5年間		奴隷		
33	フアン・ロペス	24	中国、マニラ	黒クレオールと結婚	アロンソ・ロドリゲスショップ	4または5年間	服飾職人			妻は今は無料
34	スサナ	30	キャプテンルーカスヘレスの家			5年間、メキシコから		奴隷		グラナダ王国とテラー貿易の夫。
35	マリア	18	ポルトガルからイ	独身	フランシスコ・モレノの妻ドニヤ Micalosa家			奴隷		
36	ジョン Casca Xagua	24	ポルトガルのインド		ドニヤ Micalosa の家			奴隷		

37	バルタサー ルガフェル ナンデス	25	マカオ、ポ ルトガルか らインド	独身	ニコラ・ Tarquiの家	5、 6年		奴隷		
38	インド	30	中国、マニ ラ近郊 Penaqui	独身	アンドレ ス・Tacotan の家	5年 間		掘削		

- 1 ペルー・ポンティフィチャー・カトリック大学 リバー・アグエーロ 研究学会
において「総督府の国勢調査」ユネスコの「世界の遺産」(memory of the world: 2014
年11月)に登録するために作成した資料の原本である。

“Padrón de los indios que se hallaron en la ciudad de Los Reyes del Perú, 1613-14”

El manuscrito fue confeccionado por el escribano real don Miguel de Contreras, por mandato del XI Virrey del Perú, tercer Marqués de Montesclaros, don Juan de Mendoza y Luna, como parte de un proyecto para reorganizar la administración de su circunscripción a inicios del siglo XVII.

El original se conserva actualmente en la Biblioteca Nacional de España. Consta de 256 hojas, en formato 32 x 23 cm, empastado en cuero de carnero. La portada está escrita a plumilla con tinta negra y con fondo de colores celeste y dorado; así como cuenta con el escudo de la casa de Montesclaros.

Contiene registros de 2113 indios que vivían en 1613-14 en la ciudad de Lima. El Padrón documenta la presencia en la ciudad de Lima de indios de distintas provincias de los imperios español y portugués, (entonces bajo un mismo monarca, Felipe III de España, II de Portugal), en tal sentido, incluye anexo el “Padrón y lista de los indios e indias de La China y el Xapón e India de Portugal…” (Sudeste asiático). — 114 asiáticos: 38 “indios de la China”, 56 “indios de la India de Portugal” y 20 “indios del Xapon” (Japón)

Contiene información de nombres de los indígenas, edad, ocupación, propiedades, procedencia geográfica, tiempo de residencia en Lima, nombres de sus autoridades étnicas (caciques, en el caso de América) y encomenderos. En ocasiones, se refiere a patronímicos y topónimos en lenguas nativas. Asimismo, se refiere a los espacios públicos como calles, plazas y edificios de las instituciones virreinales.

El documento es único e irremplazable, pues constituye el primer censo realizado en territorio americano, asimismo, no se ha encontrado otro registro de la ciudad de Lima que contenga semejante riqueza de información. Su desaparición constituiría un

empobrecimiento incalculable en razón de la relevancia histórica, demográfica, etnográfica, sociológica, económica y lingüística de su información.

Dicho registro ha sido utilizado por académicos en el Perú y en el extranjero, pero su conocimiento no ha sido del todo extendido. Si bien ha tenido repercusión en los diversos estudios de la realidad peruana, la veta de información tiene potencial para generar un impacto mayor.

Desde la historia, permite reconocer la estructura física de la ciudad, la diversidad demográfica y su dinámica absorbente y cosmopolita.

Asimismo, permite un mejor conocimiento de la relación de los cacicazgos y las encomiendas con la población inmigrante que vivía en la capital virreinal peruana.

Desde la etnografía y demografía, el documento cobra vigencia en la medida en que proporciona suficiente información para iniciar un estudio prosopográfico que pueda ser enriquecido con otras fuentes.

En una línea similar, desde la sociología, se puede develar la estructura social y las dinámicas de poder que guían a la población y la ubican dentro en un sistema en el cual se registra movilidad social. Por otro lado, desde la economía, se muestra a una población indígena muy activa, que interviene en la red económica de la ciudad de diversas maneras.

Finalmente, desde la lingüística, se rescata una serie de topónimos y antropónimos de las diversas lenguas nativas que existieron y al presente se encuentran extintas.

Al dar cuenta de la presencia de japoneses, chinos y otras nacionalidades asiáticas en Lima desde el siglo XVII, el Padrón corrige la generalizada idea de que la inmigración asiática al Perú se inició en el siglo XIX, teniendo, por lo tanto, potencial para generar un impacto positivo en varias comunidades peruanas de ascendencia asiática.

En tal sentido, refuerza el vínculo afectivo en la medida en que el Perú cuenta con la segunda comunidad de origen chino en América y una presencia importante de ascendencia japonesa, segunda comunidad de origen nipón en América del Sur, quienes pueden seguir construyendo su memoria comunitaria como parte de la nación peruana.

Se puede decir lo mismo de las comunidades de inmigrantes de las distintas partes del Virreinato del Perú de entonces (que comprendiera desde Panamá hasta la Patagonia) a su capital Lima.

La Biblioteca Nacional de España cuenta con una colección extraordinaria y abundante en fondos manuscritos americanistas, pero este documento es el censo más antiguo que conserva ya no solo del Perú virreinal sino del resto de América.

Grupo de Estudio e Investigación
“Presencia de los Japoneses en el Perú . Siglos XVII—XX”
INSTITUTO RIVA AGÜERO
PONTIFICIA UNIVERSIDAD CATÓLICA DEL PERÚ
Página web:<http://ira.pucp.edu.pe/>
gruposjapon.ira@pucp.pe

この研究はペルー・ポンティフィシヤ大学リバ・アグエーロ研究学会の協力によってまとめられたものである。彼らの研究データがなければ成し得なかったことであり、特に玉城ロランド氏による資料提供に感謝する。

引用

- 1) ペルーリマ国立図書館蔵。
(<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:JuandeMendozayLuna.jpg>)。
最終確認：2016-09-03.
- 2) Contreras, Miguel de. “Padrón de los indios que se hallaron en la ciudad de los Reyes del Perú, hecho en virtud de comisión del Marqués de Montesclaros, Virrey del Perú por Miguel de Contreras, escribano de Su Majestad”. (<http://bdh.bne.es/bnearch/detalle/bdh/0000028573>). 最終確認：2016-09-03.
- 3) ペルーリマ国立図書館蔵。
(<http://revistaplano.uc.cl/wp-content/uploads/2011/12/plano-112.jpg>)。
最終確認：2016-09-03.
- 4) Mariano Bonialian. “Asiáticos en Lima a principios del siglo XVII: Les asiatiques à Lima au début du XVIIème siècle Asiatics in Lima at the beginnings of the XVIIth century”. (<https://bifea.revues.org/7540>). 最終確認：2016-09-03.
- 5) Daniel Méndez “El Galeón que unió Asia, América y Europa”. (<https://i2.wp.com/www.zaichina.net/wp-content/uploads/2013/05/ruta-galeon-de-manila-mapa-antiguo.jpg>). 最終確認：2016-09-03.
- 6) “16th century Portuguese Spanish trade routes”. (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:16th_century_Portuguese_Spanish_trade_routes.png). 最終確認：2016-09-03.
- 7) “Cornelis Ketel. Retrato de Richard Goodricke de Ribston (detalle) e ilustración de ‘planchador’ de cuello”. (<https://vestuarioescenico.files.wordpress.com/2013/05/portrait-de-richard-goodricke-of-ribston-par-cornelis-ketel.jpg>). 最終確認：2016-09-03.

Received : October, 5, 2016

Accepted : November, 9, 2016